徒然草第一段における小段落の構造についての考察

小林恭治

一

古典における文法的研究・いわゆる文論と言われる研究は、今日までにも多くのものを数えることができる。それは、一つの文における構造の研究であった。そのほか、語注・語釈についてもまた、きわめて多くのものが数えられる。それは、作者の用いた語についての考察によって、作者の思想を見出そうとするものであった。

これらの研究の多さに比較して、古典における文章の研究があまりにも少ないように思われる。「文章論」と銘うたれた研究も、内容を探れば、ほとんどが文論・文法論であった。あるいは文章論的体裁を持っていても、実証性に乏しい観念的・総体的文体論である。個々の文章を把えて解剖し、それによってまとめ上げた文体論はほとんどないのである。それは、あるいは文章研究の方法がまだ確立されていない証拠かもしれない。

ともあれ、私はここに、教壇に立つ者の立場から「文章」を考えてみようと思う。高等学校学習指導要領によれば「古典としての古文を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を深める」のが大きな目的になっている。すなわち、古典の中の日本人としての思想を正しく把むことが何をおいても先決問題であるということである。生徒達の望むものも、ことにそれが高学年に及ぶほど、まじめな学習者であるほど、古典の持つ人間の生き方なのである。彼等は真剣に、人生に対する目を開くべく古典に取り組もうとしているのである。我々は、彼等の期待に報いるべく努力しなければならないはずである。

しかし、教壇の六割を占める古典授業においてしていることは、用語の解説と文法的説明が大半を占めているのである。古典の学習は、古めかしく時代から離れた用語の由来とたいくつな文法的解説と、気のぬけたような現代語への置き換えに終始しているのであって、生徒達が古典を敬遠するとすれば、それは古典が難解で時代の要求に応ええないのではなく、教授法のあり方に問題があると考えられる。彼等が求めるものは、現代語への置き換えではない。その内に秘められている作者の思想なのである。

もちろん、用語・文法の中には作者の思想が現われるのは当然の

ことである。すぐれた研究者であれば、そこに、作者さえ意識しなかった作者の精神の内部構造を明らかにするであろう。しかし、研究者としての視野の広さを持たない高校生に、それを望むのは無理なことであると考えなければならない。無理なことを承知しながら、なおそれを望み、古典に対する情熱を持たないのを古典の思想のせいにしてしまうのである。生徒達はそんな中にあって、ついに彼等の求める人間の生き方を見出しえず、期待を裏切られて古典から去って行くのである。

それでもなお、一部の生徒達は、むしろ直感的に、その思想を感じうるであろう。しかし、それは明確に裏づけされないために、自分の身体をも動かす確信とならず、やがて忘れられていくのである。

私は、生徒達の期待を裏切らない、古典の思想的理解のための一方法を文章論に求めようと考えるのである。これは、「指導要領」にも「文脈や段落を考えて」として示すところでもある。

作者が、自己の思想を表現しようとして作品を作るとき、まず考え及ぶのは素材である。何によって表現するかはきわめて重要なことである。次には、それら素材の構成方法である。用語の選択とその構成は、むしろその後にされるものであり、無意識のうちにされる場合が多いとさえ考えられる。用語や文法研究も、そのような無意識のうちに現われた、いつわりのない作者の世界観であるという意味で研究さるべきものである。それと同様に、素材と素材の構成に作者の世界観を探ることができることは言うまでもないことである。その意味で、作品全体としての素材・構成を研究する作品論はきわめて重要であることもちろんである。

しかし、教室における時間は制限があり、きわめて短い。一作品全体に目を通すことができるなど皆無と言ってよい。そのような状態の中では、作品論は、それがいかにすぐれているとしても、生徒達に観念的な理解はさせることができても作品と読み合わせた実感的理解は望むことができない。文の中からひしひしと迫ってくる力を実感することのできるのは、作品を読むときのみであり、作品論はどこまでも作品論でしかない。彼等が必要とするものは、自分の持つ少ない時間の中で読むことのできる文章から、少しでも多く、早く、古人の思想を見出し実感する方法である。短い文章の中に現われる素材と構成を見出すことである。その要求に応えうるものは、作品論的なものではなく、むしろ文章の段落構成の考察でなければならない。先に文章論と言ったのも、実は、この文章の段落的考察の意味においてである。

もちろん、段落については、現代文において不完全ながら相当やかましく言われていることであり、いまさら言うことでもない。しかし、古文においては、その注釈に平行して進んでいるべきはずの段落分けの作業が、充分行なわれているとは言い難い。段落については、あらためて研究するなどの必要は無いと言う態度が見られる。そうして直感的、あるいは前例そのまゝをまねた分割方法をとり、たとえ句切り方を前例よりかえたとしても、他の注解に注ぐような細心の注意を払った解説はせず、あとはどうとでも勝手にせよという態度がみえる。そこには、段落に対するきわめて軽い考え方があるように思われるのである。

しかし、先にも述べたように、段落構成は作者の思想の直接的現われであり、その解釈は作品思想の解釈に直接ひびいていくのであ

る。ことに随筆などという型においては、それが思想の流れを生命とするだけに、この、段落の把握は、作品解釈のポイントになるものである。

以上のような観点から、ここに古典随筆として最も教室になじみの深い徒然草をとりあげ、その段落考察をしてみようと思う。

「段落」と言う語は、現在きわめて種々の解釈がされており、学問的用語としてはあいまいな点が多い。が便ぎ上「小主題をもって統一されている文集合の切れ目、または、その文集合の全体」(増淵恒吉)としておく。この考え方に従うと、徒然草の場合は、現在分けられている二百四十三段の一つ一つが一段と認められる。また増淵氏は「段落の中で、文相互の内容の上での親疎を考えていくつかの文または文集合にくぎったものを『小段落』または『ブロック』と呼ぶことにする。」と段落内の文構造について述べられる。私もまたここでその「小段落」についての研究をしようと思う。しかし、氏は「内容の上での親疎」という観点のみをみられているが、その上に、「段落を構成する単位としての働きを考慮して」ということばを冠せたいと思う。それは、一段落内においても、文と文または文集合と文集合の関係は単に平面的に羅列したものではなく、それらの構造は立体的であり、その構造の一つ一つに作者の思想がこめられているのであり、死せる立体構造ではなく、作者の心理・思想が通った統一体の一部分として「小段落」を見るためである。

二

(A)いでや此の世にむまれてはねがはしかるべき事こそおほかめれ・(B)御門の御位はいともかしこし・竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき・一の人の御有様はさら也・たゞ人も舎人など給はるきはゝゆゝしと見ゆ・其(の)子むまごまでははふれにたれどなをなまめかし・(C)それよりしもつかたはほどにつけつゝ時にあひしたりがほなるも・みづからはいみじと思ふらめどいとくちおし・(D)法師ばかりうらやましからぬものはあらじ・人には木のはしのやうに思はるゝよと清少納言がかけるもげにさることぞかし・いきほひまうにのゝしりたるにつけていみじとはみえず・増賀ひじりのいひけんやうに・名聞ぐるしく仏の御をしへにたがふらんとぞおぼゆる・(E)ひたふるの世すて人は中〳〵あらまほしきかたもありなん・(F)人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ・物うちいひたるきゝにくからず愛敬ありて・こと葉おほからぬこそあかずむかはまほしけれ・(G)めでたしと見る人のこころをとりせらるゝ本性みえんこそ口おしかるべけれ・(H)しなかたちこそ生れつきたらめ・心はなどか賢(き)より賢(き)にもうつさばうつらざらん・(I)かたち心ざまよき人も・ざえなく成(り)ぬれば・しなくだり顔にくさげなる人にも立(ち)まじりて・かけずけをさるゝこそほいなきわざなれ・(J)ありたき事はまことしき文の道作文和歌管絃の道又有職に公事の方人の鏡ならんこそいみじかるべけれ・(K)手などつたなからず走りがき・声おかしくて拍子とり・いたましうするものからげこならぬこそをのこはよけれ・

(徒然草総索引・時枝誠記・による。たゞし行がえは無視した。)

右は、徒然草第一段の全文である。この文章の小段落区分について、次のようなものがあげられる。

(1) [ABC] [DE] [FGHI] [JK]

(2)

A
B C
D E
F G H I
J K

(3)

A
B C D E
F G H I
J K

(4)

A
B C
D E
F G
H I
J K

(1)の区分をしているものに、

○日本古典全書・橘純一・朝日新聞社

○改稿徒然草詳解・橘宗利・内海弘蔵

○新修徒然草・沢潟久孝監修・白楊社

(2)の区分をしているものに

○日本古典文学大系・西尾実・岩波書店

○徒然草全講・佐成謙太郎・明治書院

○完修徒然草解釈・塚本哲三・有朋堂

○古文㈠（古典乙1）・東京書籍KK

○新選古文一（古典乙1）尚学図書

(3)の区分をするものに

○徒然草総索引・時枝誠記・至文堂

○古文（乙1）大日本図書KK

などがあり、この一文章においても種々の段落区分がなされている。

このような相違は、この文章の解釈のしかたによっていることはもちろんであるが、単にそれだけにとどまらず、小段落に対する認識のしかたにもかゝっているのである。小段落に対する正しい認識に立ち、その見地から、文章の解釈がなされ、正しい表記法がなされなければならない。

(1)の区分においては、Aを独立したものとせず、ABCをまとめて一小段落としている点に、他との著しい相違が見られる。この意味について明確に解説されているものは見たことがない。しかし、この第一段の説明の所に「この世において、どんな望みをかけ、どんな願いを立てたらよいであろうか、――これが作者の、本書の開巻第一に、まず説こうとした問題なのである。で、作者は、第一に高位高官、第二に法師、第三に貌ありさまというように、人の一般に望み願うところのものを挙げて、（略）」（改稿徒然草詳解・橘宗利・内海弘蔵）とのべられているのを見ると、BC・DE・FGなどをそれぞれ小段落として認め、それらを包括し、それらすべてにかゝっていく文としてAが位置している。すなわち、A文を前提としてその細分化したものが以下に続く小段落であることを認められていることは明らかである。したがって、BC・DE・FGなどに小段落を認めるとすれば、当然Aには小段落が認められているはずである。(1)においては、解釈ではAを小段落と認めながら、表記においてはBC・DEなどと同列の小段落と認めない表記がなされているのである。

その理由は、第一にはAが通常の見方からするには一小段落としては短かすぎるという考え方がある。第二には、いわゆる段落全体を構成する単位としての小段落という意識が希薄であったと考えられる。小段落と小段落との関係を考察した上で、全体を構成する場合のそれぞれの小段落の位置を考え、統一のとれた小段落に分け、表記する意識に欠けるところがあったと考えられるのである。それさえ明確であったならばDE・FGに小段落を認め、表記しながら、Aをそれらと同格のものとしての表記をしないことはできない

はずである。

このような文段意識の不明確さ・不統一性は、古典にあっては、それが一度解釈され、文段の立てなおしが行なわれて提示されていると考えられるだけに、読者の混乱を招きやすくなる。実際に、ことに文段意識のしっかりしていると見られる生徒によって、「ABCが一つの意味に統一された小段落であり、DE・FGなどと対等に並んでいるのである。」という誤解がされているのである。これは、この一段に示された思想を把握するのに著しい障害となるものであり、できるだけ早く思想的理解へ導くという意志に反するものである。とにかく、このような不必要な混乱をさけうる表記が望まれるところである。

次に、BCを身分・家柄についてのものとして一つにし、DEを僧についてのものとして一つにするのが普通の見方であるが、この点については、(3)の区分の仕方に特色がある。それは、このBCとDEを同一系列とみなして一小段落に含め、その内の節として二分しているのである。（点線で示している。）これは、次のFGHIを一つにまとめている点からみて、後者の「貌・ありさま」などを個人的要素としてまとめ、「身分・家柄・法師」を社会的要素としてまとめたものと考えられる。あるいはまた、僧が社会的地位として一般の人々に迎えられていたことでもあり、身分という感じも「法師」の感じの中にはあったであろう。あるいはまた表現の面においても「みづからはいみじと思ふ」「したり顔なる」などには、すぐ法師に移っていくような連想に直接的なものがある。以上どれからみても、一まとめにする方が良いと言える。

しかし、それにもかゝわらずこの意見には同意しかねる所がある。

第一は、この文章において社会的・個人的という要素の分け方が妥当であろうか、という疑問である。これについては後で述べる。

第二は、BCの場合とDEの場合には発想方法に相当の相違が認られることである。前者にあっては、肯定的な表現を取りながら次第に否定に傾いていくのであり、一種客観的・理性的発想がみられる。しかし、後者にはそのようなおだやかな思想の流れは見られない。最初からいきなり強い否定表現を取っている。「これは、仏教が盛んで、法師がひどくもてはやされていた当時だから、こういったのである。」（改稿徒然草詳解）という落着いた解説では言いつくせないはげしさを持っている。それは、この部分を除けば、すべて肯定から否定へと移って行く表現であるのに、ここだけは否定が最初であり、最後にきわめて限定の強い肯定を加えているのでも明白である。身分・家柄が高いということは、かなわぬことではあるが、もし事情が赦せば「あらまほしき」ことなのであり、かたち・ありさまについても同様のことが言えるのである。ただ法師だけは、成りうるとしても成るべきものではないのである。そのような気勢のはげしさを文章構造が他と全くちがった構造をとって示しているのである。他の場合のごとき客観的な発想は失われ、きわめて主観的発想によっているのである。徒然草全体に法師に関する笑話が多く語られているのも、その間の事情を示すものである。

しかし、法師すべてに嫌悪の目を向けるのではない。「いきほひまうにののしりたる」法師に対しての嫌悪である。彼にとっては、「さるべきゆえありとも法師は人にうとくてありなん」「すべて我が俗にあらずして人に交れる、見ぐるし」と言うごとく、法師は世

をはなれて仏道にはげむものであった。世に交わらんとする法師の見苦しさは、百八十八段に、「子を法師にして『世渡るたづきともせよ』と言ったところ、子は馬乗りを習い、早歌を習い、ついに説経を習うひまがなくて年を取ってしまった。」という話によって象徴的に語られているところである。

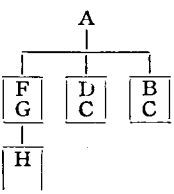
このようにして、世の評判を受ける法師のあり方に対する怒りが、ことにそれが仏に仕える身という彼にとっては理想とすべきものの名によって行なわれているだけに、客観的発想による余裕を持たせなかったのである。彼の心理からみると、身分・家柄と法師は、とらえる次元が異なっているのである。

この、BCとは全く異なった発想の文章を、BCにつけてまとめて一小段落とするには問題があると考えるのである。これは、思わず出てしまった心の震慎とも言うべきところであり、たとえそれが、社会・身分として統一される内容ではあっても、やはり(1)(2)(4)のごとく、それぞれを小段落と考えるのが無難であると思われる。

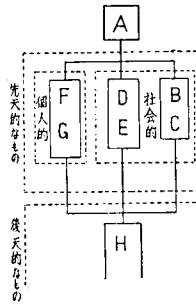
次に、FGHIの部分である。FGの部分を「かたち・ありさま」に関するものとしてまとめる点では(1)〜(4)すべて同じであるが、H以下を別なものとするかどうか、あるいは(3)のごとく節としてまとめるか、あるいは(1)(2)のごとくすべて一小段落にするか、そこに問題がある。

Hの最初の部分「しな・かたち」については、現在大別二様の解釈がされている。一つは「しな」を身分・家柄と見る説（塚本・浅尾・松尾・佐成）であり、いま一つは人品・人柄と見る説（佐野・山田）である。

後者に従えば、Hはすぐ前文FGを受け、それを否定しながら「心はなどか」と進んでいくものと解される。すなわち小段落相互の関係を図で示せば次のようになる。



前者に従えばBC・DEを受けて「しな」と言い、FGを受けて「かたち」と言ったと解される。しかも、前者が通説とされているところであり、学校教材としても一般にとられているのもそれである。したがってここではこの前説に従って文段作業を続けることにする。これによれば、この部分は単に前文FGを受けるのみではなく、BC・DEとそれまで流れてきた思想をまとめ、再出発を志していると解さなければならない。その際、再出発のための発想を何に求めたかと言うと、それまで「しな・かたち」の先天的要素を見てきた目を、自己の意志と努力によって変化させることのできる後天的要素に求めているのである。のがれられない社会的桎梏と変化不可能な先天的要素に求めえなかった「ありたきこと」を、自己の心に求めようとしているのである。「しな・かたちこそ生れつきたらめ」ということばは、その意味で大きな転換を意味すると見なければならない。図式的に表わせば次のようになる。



白石説がこの部分を一つの節として見られているのは、この考え方に一歩近づいたものと言うことができる。が、白石説においてこれを小段落として認められなかったのは、先にも述べたように、BCDEを社会的要素とし、それに対してFGHIを個人的要素としてまとめられたためである。その考え方からすると単純に意味が把えられるように思われるが、「しな・かたちこそ生れつきたらめ」の受けたことばを無視した形になっているのである。白石氏もこの「しな・かたち」を「身分やようぼう」と解されているのであり、この部分がBCに直接関連を持つと考えられているのである。しかも、そのように解すると、BC・DE・FGをまとめたものの否定がHに行なわれているのであり、それは氏の考えられた社会的要素・個人的要素の観念をこえているものであり、そのようなHは、BC・DE・FGすべてがまとめられるにしても、分けられるべきものである。そのうえ「生れつきたらめ・心はなどか」という作者の移り行く心の躍動を持つ語を全く死語としてしまわなければならないのである。思うに、氏の考え方の中には、まだ、段落を静的・平面的なものとして理解する意識が残っており、段落相互の関係を作者の心の反映として、動的・立体的・あるいは有機的なものとして生きた把え方をすることに充分の注意が払われていないものと考えられる。

この点においては、(4)の文段区分は、これを節と見ての区分か小段落と見ての区分かは明確でないが、一応注意が払われているものと言えよう。

次にIの部分である。「心ざまよき」について、諸注ほとんど「気だてのよい」としている。徒然草には他に三十六段に一例があるのみで明確な断定はできないが、「気だてのよい、人格のできた」という意味であると思われる。しかもこれは、才（学問、芸道）とは別なものとして考えられるものである。この語は突然Iに現われたように見えるがそうではない。

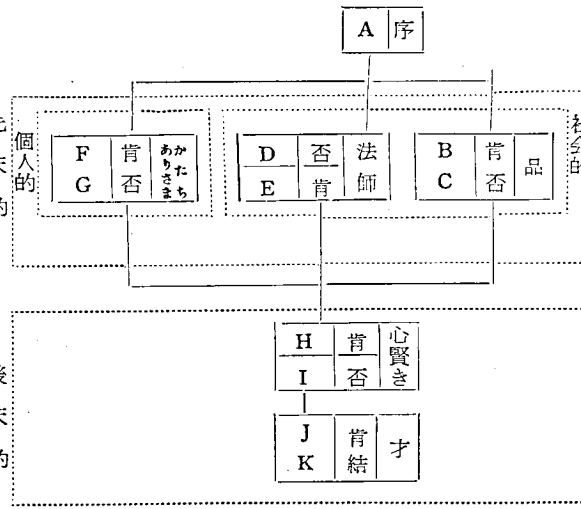
Hの「心賢き」ことについて諸注は別段目新しい解釈を加えていず、ほとんどのものが「心はどうしてか、賢い上にも賢い方へと」と解している。用例についてみると、「おろかなる」に対して、人格の高いものゝ意に用いられているのである。

また、Gの「こころおとりせらるる本性」についてみると、諸注は、「がっかりせずにはいられない地金」というほとんど同じような解釈をしている。たゞ注意すべきなのは、用例の上からみて学才について言ったものはなく、すべて人の人格・心の姿勢について言っていることである。

以上の点を考え合せてみると、Gは、Fに言った内容の欠陥をにおわせながら、A～Fまでの文をしめくゝったのである。その欠陥は「心のたしなみ」のないことであった。そこで、Gまでで文を収めるや、それまでのすべてを「品かたちこそ生れつき」と否定して、人格的高さを強調したのである。それがHである。Iは、その人格的高さのみでは不完全であるという否定表現である。その意味でIとHとは同小段落にまとめうるのである。

JKは、このようにして流れてきた一応の結論であり、一応の休止点である。

以上を図式的に表現すると



となる。すなわち、この文章は単に並列的につながっているのではなく、又素材のられつではなく、立体的に構成されているのである。

また、これらの小段落の各々についてみると、それは否定的部分と肯定的部分とによって構成されている。しかも、前文に否定されたものを補うものとして次の文が置かれるのである。BはCに否定され、その補いとしてFが考えられるが、これもGに否定される。それらすべては望ましいものではあるが、「生れつき」のものであり、望みたくも望みうるものではない。望みうるもの、実現の可能性のあるもの、そこに新しい展開が求められる。それがHである。しかしこれもIに否定される。そして最後にJKと一応の休止を得る。しかもそれは、このような否定の中にあって、いつ打ち消されるかもわからない不安を内蔵しているのである。心にうかぶものを次々と否定し去り、その否定によって次への発展のエネルギーを得るのである。兼好の否定的発想法を明確に映し出しているのである。彼にとって存在自体が空虚である。そういう世捨人としての思想が、段落の構成に反映している。ことに、法師に関するDEのように、その展開に異例を示すところのある場合などには、作者の精神構造がことに明確に現われることにもなる。

三

以上のように、段落、あるいは小段落相互の関係は、平面的・静的なものではなく、前段に何等かの心理的関連を持っており、反撥・同意・不安・不安への補いとして有機的結合をなすものである。それを、生きた形のまゝ把握することが、最も直接的に著者の内部思想を把えることのできる方法なのである。そこにはじめて古典の生命が把握できるのではあるまいか。とすれば、古典一般のものについても、現在よりももっと内部にくい入った段落構造が考えられるべきであろう。

参考文献
○文章の論理と読解指導　堀川勝太郎　明治図書
○講座　解釈と文法7　現代文　明治書院
○徒然草の語法と文脈I　白石大二　明治書院
○全訳　徒然草詳解　前島成　大修館書店

○徒然草全講　佐成謙太郎　明治書院
○完修　徒然草解釈　塚本哲三　有朋堂
○改稿　徒然草詳解　内海弘蔵　橘宗利　明治書院
○徒然草諸注大成　田辺爵　右文書院
○徒然草総索引　時枝誠記　至文堂
○日本古典文学大系　徒然草　西尾実　岩波書店
○高校　古文（甲・乙）テキスト

（栃木県足利女子高等学校教諭）